

説教 『愛の響き、裁きの響き』 山本 護牧師  
聖書 申命記 15:11/マタイによる福音書 25:41~46

イエスは終りの日の審判場面を比喻で語った。「こうして、この者どもは永遠の罰を受け、正しい人たちは永遠の命にあずかるのである(マタイ 25:46)」と、ものすごく単純な審判だ。善悪にしても、愛のふるまいにしても、それぞれ微妙な段階があるのに、きわどいところで「永遠の罰」か「永遠の命」かにふり分けるのか。おいおい、そりゃあまりに乱暴じゃないか。一般に「善良な市民」と称する時、善を行なっているというよりも、悪をしていない者のことを言う。日常で多少は小狡いことをしていても、悪とは思われない。いわゆる「犯罪者」でなければ、まあ善良な市民の一人に数えられる。

羊飼いと王を重ねて譬えることも極端だが(25:32~33)、王は右側にいる者を祝福し(25:34)、左側にいる者に業罰を課す(25:41)極端な裁きをする。業罰の根拠は「お前たちは、わたしが飢えていたときに食べさせず、のどが渴いたときに飲ませず、旅をしていたときに宿を貸さず、裸のときに着させず、病気の時、牢にいたときに、訪ねてくれなかった(25:42~43)」というもの。ところが裁かれる者は身に覚えがなく、「主よ、いつわたしたちは〜お世話をしなかったでしょうか(25:44)」と不満そうだ。彼らにしても、私たちにしても、「王のような主」なら見逃さずにお世話するし、イエス様だと分かればお迎えもする。あるいは教会の兄弟姉妹であるならば、心から歓迎するだろう。

王は答えて言う。「はっきりしておく。この最も小さい者の一人にしなかったのは、わたしにしてくれなかったことなのである(25:45)」。つまり飢え渴いた、宿も服も無く、病気で、入獄していた者がイエスだったのだ、と。共にいる以上に、イエス御自身が「最も小さい者」としておられる。この場合、求められている愛の行為は、大そうなことではない。それを行なった者が忘れてしまう程度のことだから(25:37~38)。称賛を受けるような愛の大きな実践なら、謙虚な者でも少しは憶えているだろう。ささやかな愛の実践は難しいことではない。私たちだって直接・間接で、それを行なっているのではないか。おっ、それなら私は「永遠の命組」か、ああ良かった。その一方でとても「主」には見えない怪しげなキリストは手助けしていない。だとすると、「永遠の罰組」になるのか(25:46)。

「救い」か「業罰」かは、人間には判断できない。すなわち愛の実践度合いで、審判を押し量ることはできないのだ。だとすればこの聖書箇所焦点は、また別のところにあるのではないか。大胆に思い味わおう。私たちは「右の羊」でも「左の山羊」でもない(25:33)。では私たちはどこにいるのか。「飢えたり、渴いたり、旅をしたり、裸であったり、病気であったり、牢にいる(25:44)」。私たちは、こうした者ではないのか。イエスはこんな私たちを、そのまま御自分の事とされる。そして同時に、御自分の事とされた者同士にも警告する(25:45)。一つの御言葉に、愛の響きと、裁きの響きがある。

「この国から貧しい者がいなくなることはないであろう。それゆえ、わたしはあなたに命じる。この国に住む同胞のうち、生活に苦しむ貧しい者に手を大きく開きなさい(申命 15:11)」。キリストは貧しい「あそこ」にいる。いや貧しい「ここ」におられる。キリストゆえ、「ここ」と「あそこ」は一つ。



【おまけのひとこと】

渴いている人がいる 私がそうである 病の人がいる 私がそうである 獄に囚われた人がいる  
それは私だ ここにキリストがいて 渴きや病を負っておられる それゆえ私は 囚われても自由